



【関連用語】

- 縹子（しゆす）----- 経（たて）糸・緯（よこ）糸五本以上から構成される、織物組織（三原組織）の一つ。サテン。朱子とも。
- 綸子（りんず）----- 縹子織地に縹子織の裏組織で模様を織り出した絹織物の一種。
- 縹珍（しゆちん）----- 縹子組織の地に多色の絵緯（えぬき）と呼ばれる緯糸で文様を織り出した絹織物。
- 縮緬（ちりめん）----- 布面に細かなしじら縮みがある絹織物の一種。
- 平絹（へいけん）----- 絹織物の一種。経緯（たてよこ）ともほぼ同じ太さの糸を使って平織としたもの。
- 綾（あや）----- 浮糸が斜めに並列してあらわれる、斜文組織のこと。
- 縹（ろ）----- 縦糸と横糸をからませて織った透き目のある絹織物。

- 打掛（うちかけ）----- 室町時代以降の女性の礼服の一種。小袖に打ち掛けてはおることに由来する。
- 小袖（こそで）----- 袖幅がやや狭く袖丈の短い衣服。
- 帷子（かたびら）----- 生絹や麻布で仕立てた、ひとえ仕立ての衣服。
- 蒔絵（まきえ）----- 漆で文様を描き、その上に金銀粉などを固着させ磨いたもの。
- 角盥（つのだらい）----- 水や湯を入れて、手や顔を洗うための容器。お歯黒を染める際にも用いる。
- 耳盥（みみだらい）----- 角盥と同様のもの。把手（とって）の角の部分が耳の形に似ているところからいう。
- 台輪（だいわ）----- 盥をおく台。
- 椀（はんぞう）----- 湯・水を注ぐのに用いる器。半挿。
- 湯桶（ゆとう）----- 湯を入れる桶。
- 手拭掛（てぬぐいかけ）----- 手拭をかけておく用具。
- 脇息（きょうそく）----- 座具の一種。座ったとき、肘をかけたためたれるための用具。
- 書見台（しょけんたい）----- 本を読むための台。
- 女乗物（おんなのりもの）----- 江戸時代、身分の高い女性が乗った駕籠。

- 染分（そめわけ）----- 生地を2色以上の色で染め分けること、また、染め分けたもの。
- 縹（はなだ）----- 花田とも。濃い青色。
- 猩々（しょうじょう）----- 中国の伝説上の生き物。猩々緋は鮮やかな紅色のこと。
- 萌黄（もえぎ）----- 萌葱、萌木とも書かれる。黄色みがかかった緑色。
- 浅葱（あさぎ）----- 薄青、薄藍、薄緑、水色などをさす。
- 鶺鴒色（ひわいろ）----- 黄緑色。鶺鴒の羽の色を連想して名づけられたもの。

- 蓬萊模様（ほうらいもよう）----- 吉祥模様の一種。波に岩座を配し、松竹梅鶴亀を表した模様。
- 立涌（たてわく）----- 吉祥模様の一種。大地から湧き立つ霊気を象徴する。／雲立涌：（くもたてわく）
- 沙綾形（さやがた）----- 吉祥模様の一種。卍（まんじ）の字をくずして、つづり連ねたような形のもの。
- 違鷹羽（ちがいたかのは）----- 鷹の羽二枚を交差させた図柄。
- 伊達紋（だてもん）----- 家紋の位置に配されたおしゃれ紋。
- 紋散（もんちらし）----- 紋を一面に散らして模様としたもの。

- 中啓（ちゅうけい）----- 扇の一種。
- 檜扇（ひおうぎ）----- ヒノキの薄板を糸でつないで扇状にした儀礼用の扇。
- 几帳（きちょう）----- 平安時代、貴族たちが部屋の仕切り、目隠しとして用いた調度品。
- 御簾（みす）----- 貴人の用いたすだれ。
- 御所車（ごしょぐるま）----- 平安時代、貴族たちが外出用に用いた牛車（ぎっしゃ）のこと。
- 源氏車（げんじぐるま）----- 御所車のうち、車輪のみを意匠化したもの。
- 薬玉（くすだま）----- 邪気を払うため、じゃ香や沈香を玉状にして、飾り付けてつるしたもの。江戸時代には華やかな装飾品として発展した。

- 貝桶（かいおけ）----- 貝合わせ用の貝を入れる容器。
- 冊子（さっし）----- 和紙を綴じた書本。／卷子（かんす）：和紙をつなぎ合わせ巻物にしたもの。
- 裏白（うらじろ）----- シダ植物のこと。葉の裏が白いことから。
- 藪柑子（やぶこうじ）----- 別名十両（じゅうりょう）。赤い実をつける縁起のいい植物。



令和4年秋季特別展

ジャパニーズ・ウェディング

- 会場 2階 企画展示室・講堂  
1階 松平家史料展示室・館蔵品ギャラリー
- 会期 令和4年10月8日（土）～  
11月23日（水・祝）
- 休館日 10月31日（月）

婚礼とは、婚姻（結婚）に際して行われる儀礼を指します。日本には、時代・地域・社会階層・生業などによって異なる、さまざまな婚姻形態が見られました。婚礼も、多様な婚姻形態によって影響を受け、さまざまに変化していったと考えられます。婚礼の様子が知られるのは平安時代半ば以降です。鎌倉時代には武家が台頭し、女性が男性の家に入る嫁入婚が行なわれるようになりましたが、嫁入婚は、やがて公家や庶民にも影響し、以降の主流となっていきました。

本展では特に、室町時代以降の武家の婚礼に起源を持ち、江戸・明治・大正・昭和時代へと引き継がれていった婚礼文化を、衣裳を中心に紹介します。

第1章 江戸時代の武家の婚礼

江戸時代の大名家の婚礼では（厳密には家格や官位によっても異なる）、男性は嘉珍色（藍染による黒みを帯びた青色）の麻の袴（参考出品・図2）を着用し、女性は白幸菱模様の綾織物を用いた打掛（図1、未出品）を着て、式に臨みました。式の後には、色直しとして、赤幸菱や黒の打掛に着替えました。

さて、今回注目していただきたいのは、越前松平家伝来と伝わる空色縮緬地の蓬萊模様打掛（図3）です。本作のような蓬萊模様の打掛は類似の作例が残っており、典型的な婚礼衣裳の模様と考えられます。この打掛は、いったい誰が着用した婚礼衣裳なのでしょう？

江戸時代には生地の種類で格付けがあり、縮緬は、綾織物・綸子・紗綾の次に位置づけられました。また家は異なりますが、江戸時代後期の紀州徳川家の典礼などを記した『南紀徳川史』には、「空色」の婚礼衣裳が登場し、比較的身分の低い女中が着用したことが記されています。生地の格付けや色は、時には家の家格や官位をも表象するものとして用いられ、当時の武家は共通の理解を持っていました。以上のことから本作は、越前松平家に勤めていた、比較的身分の低い女中が、主家の婚礼に際して着用した婚礼衣裳と見てよいでしょう。



図1（参考・未出品） 白幸菱模様打掛 紀州徳川家伝来 東京国立博物館蔵 TNM Image Archives



図2 嘉珍色麻地持筋葵紋付長袴 越前松平家伝来 福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）



図3 空色縮緬地蓬萊模様打掛 越前松平家伝来 個人蔵

## 第2章 江戸時代の町人の婚礼

つづいて、江戸時代の町人層の婚礼衣裳を紹介します。身分社会であった江戸時代には、武家と町方では明確な区別がありました。それは衣裳にも言えることです。

檜扇と葵の模様が全体に配された、白・赤・黒の揃いの打掛(図4・5・6)は、江戸時代の近江商人の家に伝えられた婚礼衣裳です。近江八幡に住んだ“八幡商人”のひとりで、水戸藩御用達でもあった灰屋久兵衛家に伝えられました(註)。このうち、黒の打掛は屏風装に仕立て直されています。近世以前の染色では、黒色は媒染剤の影響で、時とともに酸化が進み朽ちてしまうため、現存数が限られます。本作では、江戸時代の町人層が着用したという伝来が明らかで、さらに三色の打掛が欠けることなく残っていることは大変貴重です。これらの打掛は、裾に厚く綿が入れていることから、それぞれ順番に色直しとして着用したものと考えられます。

(註:小川裕久「近世の装い」(徳島市立徳島城博物館『華麗なる装い』)2003、p.65)



図4 白紵子地檜扇葵模様打掛  
近江八幡市〈前期〉



図5 紅紵子地檜扇葵模様打掛  
近江八幡市〈前期〉



図6 黒紵子地檜扇葵模様打掛  
近江八幡市

さて白・赤・黒は、婚礼衣裳の打掛の色として、現在でもなじみがありますが、近年の研究で、さらにもう一つ、青色の婚礼衣裳が用いられた可能性が指摘されています(図7)。第1章で紹介した、越前松平家の女中が着用した打掛も、青系統の色(空色)でした。町人層が着用したと考えられる青色の打掛の例から、そこに施された模様の意味や生地を手がかりに、青色の婚礼衣裳について、ぜひ考えをめぐらせてみてください(※)。



図7 縹平絹地桐立木模様打掛  
共立女子大学博物館

## 第3章 伝統の継承と革新 ～近代の婚礼～

明治時代以降の婚礼衣裳は、近代化とともに大きな変化を迎えました。特に化学染料の導入と自動織機による生地の改良は服飾産業を発展させ、さらに身分制度が取り払われたことで、衣服の需要は格段に裾野を広げました。明治時代以降の婚礼衣裳は、江戸時代以前とは、技術的にも、着用者層にも大きな違いが見られます。しかし、その根底には、江戸時代以来の武家の伝統が引き継がれています。

本章では特に、京友禅の老舗・千總の大正2年(1913)と昭和14年(1939)の2代にわたる婚礼衣裳(図9・前期展示)、江戸時代に信濃・須坂藩(長野県)の御用を務めた豪商、田中家に伝わった大正4年の婚礼衣裳一式(図8・後期展示)、そして、大正時代以降の裕福な子女らが着用した、それぞれの“とびきり”の婚礼衣裳(図10・後期展示、一部通期)を、着用者の違いや時代の変化に着目してご覧ください。



図9 白変わり綾地浜松模様打掛  
株式会社千總



図8 黒紵子地御簾葵模様打掛  
田中本家博物館



図10 黒縮緬地鳳凰松竹梅  
菊牡丹模様振袖  
東京家政大学博物館

紺綾地裏白模様打掛(図11)は、夫婦和合、共白髪を象徴する裏白(シダ植物)が散らされ、いかにも婚礼衣裳に相応しい模様と言えますが、ここで注目したいのは、その生地です。全体に小さな菱を四つ合わせた幸菱の模様が綾織物で織り表されています。これこそが、武家の婚礼衣裳で、式の際に嫁が着用する最も神聖な“白幸菱”と同じ綾織物の生地です。このように、細部には江戸時代以来の伝統が息づいていることがわかります。



図11 紺綾地裏白模様打掛 株式会社千總

※詳しくは、展覧会公式図録「寿ぎのきもの 日本の婚礼衣裳」(長崎巖監修・東京美術出版)をご覧ください。

講演会

「近世・近代の婚礼衣裳 - 色と模様に見られる日本人の価値観 -」

講師:長崎巖氏(共立女子大学教授・共立女子大学博物館長)

10月30日(日)午後2時~

@福井県国際交流会館(定員80名)

※要事前申込・チケット半券が必要です。



次回の展示 企画展

文化財の修理 ～未来に伝えるために～

11月26日(土)~令和5年2月5日(日)

※年末年始ほか休館日あり。

展示解説シート No.154 令和4年10月8日発行  
福井市立郷土歴史博物館 〒910-0004 福井市宝永3-12-1  
電話 0776-21-0489 Fax 0776-21-1489

担当:佐々木佳美 印刷/白崎印刷